ISSN 2189-9150

東京学芸大学

大学史資料室報

Tokyo Gakugei University Archives journal.

東京学芸大学
大学史資料室
Office of Tokyo Gakugei Univ. Archives

vol. 6

目　　次

学芸カフェテリアに関する資料の性格とその保存のあり方 …… 2
　藤井健志（人文社会科学系教授）

撫子会保存資料　解題 …… 9
　小正展也（大学史資料室専門研究員）

大学史資料室展示会報告「学藝アルバム―小金井キャンパスと附属学校のあゆみ―」…… 15
　椿真智子（人文社会科学系教授）

平成 30 年度活動報告 …… 18

学芸カフェテリアに関する資料の性格とその保存のあり方

藤井健志（人文社会科学系教授）

はじめに

本稿では、大学にある様々な資料のどれを残し、どれを廃棄すべきか、またその残し方はどのようにすべきかということについて、一つの事例に基づいて考える。このことは同時に、本学に置かれた大学史資料室の目的や、存在理由について考えることも意味している。

本学の大学史資料室は、「東京学芸大学大学史資料室規程」では、本学の歴史に関する資料の収集等を目的とすることとなっているが[1]、本来の目的には、歴史に関する資料とともに、保存期間の過ぎた法人文書を保管することも含まれるべきである。その理由および、それにもかかわらず、なぜこのような規程になったのかについては、かつて若干の考察をしたことがある[2]。その経緯から、現在、大学史資料室では保存期間の過ぎた法人文書の保管にも取り組んでいる。しかし、現在、資料を保存するスペースの余裕がないという批判が、事務職員から強く出されている。そのため大学史資料室としては、保存期間の過ぎた法人文書の何を廃棄し、何を残すべきかということについて、より具体的な検討を迫られている。本稿は、こうしたことを念頭に置いて書かれたものである。

事例として取り上げるのは、2007 年度に開設され、2018 年度末に閉鎖された学芸カフェテリア（以下カフェテリアと略す）である。カフェテリアを取り上げるのは、ここが本学内の一般的・恒常的な組織（たとえば図書館のような）ではなく、特別な予算に基づいてつくられた、短命（10 年間）な学内組織であったことに関係している[3]。こうした組織であるため、第一に設置から消滅に至るまでの資料が比較的まとまっていたこと（このことはカフェテリアが独自のスペースをもっていたことにもよる）があげられる。かなり活発な活動をしてきた組織であるために、10 年前の設置時の事務的な資料も残されていたのである。第二に、このように消滅した学内組織の資料が、今後どのように学内に残されるべきかを検討すべきだと考えたのである。消滅した組織の資料は、必ずしも歴史的な意味だけしかもっていないわけではないと思うからである。

以上のような考えに基づいて、本稿ではカフェテリアに関わる資料の性格と、今後どのように残すべきか（あるいは廃棄すべきか）を、資料に即して具体的に検討してみたい。

1. カフェテリアの概要[4]

最初に書いておかなければならないのは、学芸カフェテリアが、普通「カフェテリア」と呼ばれている飲食を目的とする食堂ではないことである[5]。学生のキャリア支援をする組織に「学芸カフェテリア」という名称が付けられたのである。

カフェテリアは、もともと文部科学省と日本学生支援機構によって 2007 年より始められた「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」（いわゆる「学生支援 GP」[6]）において、同年 9 月に採択された「学芸カフェテリアによる学修・キャリア支援―全学の援助資源の活用と最適化された学生支援プログラムの開発―」に基づいて開始されたものである[7]。

このようにカフェテリアは、基本的には学生のキャリア支援のための組織であるが、大学のキャリア支援に関わる部署が企画した講座等を、一方的に学生に提供するのではなく、二つの方向で多様な支援の実現を目指すものであった。第一に大学側に関しては、大学が潜在的にもつ様々な援助資源（施設・設備および人的資源）を積極的に発掘し、「見える化」する。第二に学生側に関しては、大学から提供される「定食」を享受するだけでなく、自身のキャリア発達課題を意識し、自分のニーズにあった支援メニューを選択できるようにするという二つの方向である。「カフェテリア」という名称は、後者に関係している [8]。

GP の予算は 4 年間にわたって措置され（2007 年度～ 20010 年度）、カフェテリアの運営経費として使われた。しかし、このカフェテリアの特徴は、GP による予算措置が終了した後も、大学の独自予算によって活動が継続されたことである。従ってカフェテリアの歴史は、2007 年から 2011 年 3 月までの第一期（4 年間）と、2011 年 4 月～ 2019 年 3 月の第二期（6 年間）に分けられる。

第一期では、カフェテリアを実質的に運営するスタッフ [9] を中心にして（後述するようにスタッフ会議が最初のうちは開かれていた）、学芸カフェテリア推進プロジェクト委員会および外部評価委員会 [10] が、カフェテリアの活動を進めていく。同時に学生モニター（2008 年という早い時点で、カフェメイツと改称される）が決められて、スタッフとともに、カフェテリアの実際の運営に積極的に関わるようになる。

カフェテリアの活動は、学生に向けた講座の開設 [11]、学生のニーズに合わせた相談 [12]、カフェテリアのウェブサイトの運営、カフェテリア・オフィスの運営 [13]、印刷物の発行 [14] 等に分けられる。

第一期のこうした活動は、文部科学省からの予算が終了したため、一応終了する。ただし以後は、学内の予算措置によって、活動が継続される。カフェテリアは学内組織の学生キャリア支援センターに位置付けられ、カフェテリアについて議論する場は、外部評価委員会から学生キャリア支援センター会議およびその中のキャリア形成部会となる。ただし、ここがカフェテリアのことのみを論じる場ではないことには、注意する必要がある。第一期において、カフェテリアの推進プロジェクト委員になったり、外部評価委員会に関係していて、カフェテリアに深く関わっていた教員が、いなくなる（関わらなくなる）のである。

スタッフとカフェメイツを中心とする講座の運営や、キャリアプランナーによる学生相談は継続され、カフェテリア・オフィスやウェブサイトも継続される。スタッフ会議は、独立したものとしては開かれなくなり、カフェメイツ会議に合わせて、カフェメイツがいる場で検討事項が協議されるようになる。

この 10 年間に 775 回の講座が開催され [15]、学生相談は多い年にはのべ 160 人以上の学生に利用された [16]。このカフェテリアは、大学の方針で 2018 年度末に閉鎖された。スタッフはいなくなり、カフェメイツは解散した。本稿を執筆した 2019 年 3 月時点では、カフェテリア・オフィスの場は、2019 年 4 月以降は、就職相談室とディスカッションルームになると聞いている。

2. カフェテリアに関する資料

カフェテリアに関して、どのような資料があるのだろうか。ただし、本稿の執筆時点は、カフェテリアの閉鎖を目前にしているとは言え、まだカフェテリア・オフィスが存在していた時期である。言い換えると、大学がカフェテリアの資料をどのように残すか（あるいは残さないか）ということを決めておらず、多くの資料がカフェテリア・オフィスに残されていた時である。この時期に、主としてカフェテリア・オフィスに残された資料を基にして本稿は書かれている。このことが、以下の記述にある程度、影響を与えていると考えられる。このことに

は留意されたい。

さて、カフェテリア・オフィスに現時点で残されている資料は、三つの種類に大別できる。第一は、第一期から第二期の運営に関する原資料である。10 年間にわたる会議資料や、支出簿、購入依頼書、講座の記録等が中心となっている。これらの多くは、ファイルに綴じられている。第二は、すでに触れているが、公刊された印刷物である。ブックレット[17]および、『News Letter』[18]、それにカフェテリアが閉鎖されたときに刊行された『学芸カフェテリア 10 年史』[19]である。第三はその他のもので、ファイル化されていない資料、および講座のビデオ記録である。

紙幅の関係で、すべての資料に言及することはできないので、どの資料を保存すべきかということを考える手がかりとして、いくつかの視点から資料を見てみよう。まず資料の重複状況である。一つの例として、ここでは文部科学省への GP の申請書を取り上げる。そこには当時、大学がカフェテリアをどのような形にしようと考えていたのか、またそこにどのような意義があると考えていたのか等が表明されているはずだから、カフェテリアにとってたいへん重要な資料になると思われるからである。

この申請書は、現在、カフェテリアに置かれている【推進プロジェクト会議】ファイル[20]および、【外部評価委員会】ファイルに綴じられている。また申請書は、ブックレット第 1 号にも掲載されているが、部分的に削除されていたり、図が少し改変されていたりする[21]。ここではファイルによって資料の重複が見られることと、公刊された印刷物に掲載された資料が、原資料通りではないことをおさえておきたい。

なお、逆に原資料になかった内容が、後の公刊物に記載されることもある。申請書そのものからは、申請に至った経緯等は知ることができないのだが、上に触れた『学芸カフェテリア 10 年史』には、その経緯がある程度書かれている。

会議記録と、公刊された印刷物との関係をもう少し見てみよう。外部評価委員会の会議記録は、議題、配布資料とともに【外部評価委員会】ファイルに綴じられている。ただし第 3 回、第 5 回の会議記録はファイルにはない。それに対して、第 3 回の外部評価委員会の記録は、ブックレット第 2 号（pp.64 ～ 67）に、第 5 回については同じく最終報告書（pp.117 ～ 124）に掲載されている。

以上のことも含め、【外部評価委員会】ファイルにある会議記録と、ブックレットにある外部評価委員会の報告との関係は、少し複雑である。第 1 回委員会の記録は、ブックレットの方にはほとんど載っていないが、第 2 回委員会の記録は、双方にある（第 1 号の pp.21 ～ 26）。ただしファイルとブックレットとでは少し内容がずれている。これはまとめた時の視点が異なるものであったからであろう。第 3 回と第 5 回については、上述の通りだが、第 4 回については、両者はほとんど同じである。第 4 回以外は、両者は補完的な関係にあり、片方に記載があることが、もう片方には記載されていない場合がある。両方を見て、はじめて全体の様子がわかるのである。

ファイルと公刊物の双方に記録が残っている例をもう一つあげておく。学生モニター会議（カフェメイツ会議）の記録は、第一期には【学生モニター委員会 / カフェメイツ会議】ファイルとブックレットの双方に掲載されている。しかしファイルに綴じられている会議記録の方が、ブックレットの記録よりも詳しいのである。

次に委員会資料のあり方を見てみよう。委員会資料が重要なのは、カフェテリアの運営について、どのようなことが課題としてあげられ、どのように議論されていたのかがわかるからである。たとえば【推進プロジェクト】ファイルには、学芸カフェテリア推進プロジェクト委員会の議題、配布資料、会議記録が綴じられている。議題や配布資料からも、当時の課題がわかるが、最も重要だと思われるのは会議記録である。残された会議記録には精粗はあるが、会議でどのようなことが論じられたかが、ある程度具体的に書かれているからである。

逆に言えば、会議記録や議事要録が詳細に書かれていない委員会資料は、その資料としての価値が落ちると言わざるを得ない。ある問題について、どのような意見が出され、どのように議論されたのかがわからないからである。第一期の委員会資料と第二期の委員会資料とを比較すると、ここでも精粗はあるが、全体的に第二期の委員会の記録が簡素になっていて、議論の具体的様子がよくわからない場合が多い。「～について説明があり、審議の結果原案のとおり承認した」という記載形式が多くなっている[22]。どのような意見が出て、どのように審議されたのかが記録されていないのである。結論のみで、議論のプロセスが示されていないということである。このことは、前述のようにカフェテリアに深く関わる教員が、新たな枠組みの委員会に参加していないということに関係していると思う。

委員会資料のもう一つの問題点は、委員会の議題、配布資料、会議記録以外に、開催案内や、開催場所の予約に関する諸資料、謝金の計算書等の、かなり細かく煩瑣な手続きに関する資料が、一緒に綴じこまれている点である。その結果、ファイルがかなり分厚いものになってしまっている。これらをどこまで残すべきなのかは、検討する必要があるだろう。

同様の問題は、【支出簿】ファイルにもある。支出簿は、各年度の支出の記録であるとともに、その証拠書類から成っている。すべての支出の領収書が綴じられているとともに、支出に関連しての連絡のやり取りや、出張関係の書類なども残されている。そのためかなり分厚いものになっているが、これらはどこまで残すべきなのであろうか。

活動の記録についてだが、まず講座に関しては、担当者とタイトルは、委員会資料のファイルや公刊された印刷物に掲載されている。ただしより重要なのは、【平成～年度学芸カフェテリア講座】ファイル（各年度のものがある）に綴じられている、受講学生の名簿と、各回の資料およびアンケート結果である。アンケートには、講座を受講した学生の講座に対する感想等が書かれている。こうした感想はブックレットにも載せられているが、一つの講座に対して 1 人の感想しか掲載していないので、量的にはファイルに綴じられたアンケート結果の方が、圧倒的に多い。また講座のビデオ記録も残されている。すべての講座で収録されていたわけではないが[23]、話の内容や話し方まで含む具体的な記録はきわめて重要である。

学生相談に関する資料はほとんど残されていない。ただ 2017 年度以降の「キャリアナビ申込書」は【キャリア・ナビ終了分】ファイルに綴じられている。もともと学生相談については、正式な記録はつくられていなかったのだが、今後の引継ぎを考えて、資料を残し始めたということである[24]。

この他、公刊物には見られない特徴的なファイルを紹介しておこう。【学芸カフェテリアライブラリー貸し出しファイル】というファイルには、カフェテリア・オフィスに置かれていた 2000 冊近い本の、学生に対する貸し出し簿が綴じられている。貸出・返却の月日は書かれているが、年が書かれていないので、何年のものかはわからないが、複数の年にわたって蓄積された資料だと思われる。

また【2009 年度進路のあゆみ】というファイルには、2009 年～ 2010 年までの『キャリア支援フリーペーパー　学芸進路ナビ＠カフェテリア』が綴じられている（創刊号～第 8 号）。それぞれが A4 裏表の 1 枚ものだが、就職内定者や教員採用試験の合格者に対するインタビュー記事で構成されている。ひと月に 2 回発行されており、カフェメイツが中心になってつくり、学内の各所に置かれていたようである。これと連動すると思われるが、「2009 年　進路の歩み～キャリア補完計画～」というものも上記のファイルに綴じこまれている。これは就職先別（教員、公務員、企業）に、4 年生が A4 の紙 2 ～ 3 枚ほどに就職活動の経過を書いたものである。全部で 30 人以上の記録があり、やや厚いファイルになっている。なおこれ以降の年度における同様なファイルは見当たらない。継続されなかったのかもしれない。

3. 資料保存のための視点

カフェテリアに関する資料の一端は、以上のような性格をもつものであるが、ここから資料保存のあり方に関して、どのような視点が導き出されるだろうか。

カフェテリア自体が新しいもの（最近 10 年間のものという意味）であるため、これらの資料は歴史的な価値があると言うよりは、より現代的な価値、言い換えれば、本学の将来構想に役立つ性格をもっていると言ってよいと思う。たとえばカフェメイツの会議記録を見ると、学生が学内で行われているイベント（カフェテリアの講座も含む）をあまり把握していないことがわかる。そのためカフェメイツは、どのようにカフェテリアの講座を周知させるかについて知恵を絞るのだが、そのアイデアは本学の学内広報のあり方に示唆を与えるものである[25]。また気楽に参加できる講座について学生が意見を交わしているが、これも今後の学内のイベントや、授業そのもののあり方に参考になる点が多い。カフェメイツはファシリテーションに関する研修を受けていたが、それについての学生の反応も残されている。

学生のニーズの把握という点でも、講座の記録、特にアンケート結果は重要である。どのようなタイトルの講座に、学内のどの選修・専攻の学生が何人ぐらい集まり、どのような感想をもったのかという情報は、将来構想に関わるものであり、大学として蓄積すべきものだと考える。ファイルに綴じられたアンケートからは、公刊されたブックレットからはわからない学生の本音がうかがえる場合もある。私には、学生が私生活に役立つ情報をきわめて強く欲していることが、印象的であった[26]。図書の貸出し簿も、キャリアに関して学生がどのような本を読もうとしたのかということを示すもので、重要だと思う。

なお以上に関しては、いくつか注意すべき点がある。第一にこうした資料は、ていねいに分析をしないと、そこから大学にとっての意味を把握できないということである。そのためには、大学の諸活動についての情報を収集して分析をする機関がないと、資料を残す意味がなくなる。第二に、とは言え、そうした機関がなくても資料を蓄積しておかないと、大学改革等で学内の情報を分析する必要が生じても、質の高い情報は得られない。第三に、ブックレット等の公刊物を保存することで資料蓄積がなされているように誤解される場合があるが、前述のように原資料の方がより詳細な情報を含んでいる。カフェテリアで言えば、ファイルに綴じられた資料は重要である。公刊物があるという理由で、元の資料を安易に廃棄することはできない。

以上のように、カフェテリアの資料は、大学の将来を構想する際にきわめて有効なものになりうる。この点で、私は注 2 で紹介した広島大学の小池聖一氏の考え方に、強く共感する。そして、大学史資料室自体が、本学の将来構想を立案する際に重要な役割を果たすべきだと思っている。

しかし一方で、最初に述べたようなスペースの問題がある。資料を保存するスペースが十分にあれば、カフェテリアの資料は、ファイルも含めて全体を残すべきだと思うが、スペースが限られている場合には、何を残し、何を廃棄するかについての検討が必要である。前述のような委員会の煩瑣な手続きに関する資料や、日常的な支出に関する資料は、将来構想の視点に立てば必要ないように思われる。より重要なのは、会議記録や学生の生の声だと思う。

だが、ここでもまた他方に、アーカイブズの「原秩序尊重原則」がある。特定の視点から無意味だと思われる資料を廃棄することは、原秩序を破壊することでもあるし、また別の視点からはそれは必要な資料であるかもしれない。しかし原秩序が尊重できないのなら、（スペースの問題から）資料は廃棄すべきだという考え方にも賛同しにくい。

完全な正解というものは、おそらく存在しないだろうが、大学史資料室として、こうした問題を丁寧に検討し

ていく必要があることは間違いない。本稿ではカフェテリアの資料に基づいて、大学における資料保存のあり方を模索したが、最後に本稿で言及した資料は、公刊された物以外は、公開されていないことに留意していただきたいと思う。将来、ファイル群が大学史資料室に移管され、公開できることを願ってはいるのだが。

注

1　http://www.u-gakugei.ac.jp/~houkis/h24tei180002.html 参照。

2　藤井健志「大学における資料保存の意味と意義」『東京学芸大学大学史資料室報』1（2014。室報はネット上で読むことができる。http://www.u-gakugei.ac.jp/shiryoshitsu/newsletter/ 参照）。なお広島大学文書館長の小池聖一氏は、大学アーカイブズ（本学の大学史資料室も大学アーカイブズである）の役割として、「大学アーカイブズを文化施設として、あるいは、ハードユーザーである教育史等の研究者のためだけにあるとの認識を持っている者も多いが、それは基本的に間違いだと考えている。機関アーカイブズとして設立される大学アーカイブズ・文書館とは、何よりも、公文書等の管理に関する法律（中略）のもとにある国立大学法人にとって公文書管理業務の中核であり、また、法人業務の合理化に寄与する存在であるべきだと考えている」と述べている（小池聖一「国立大学法人にとっての大学文書館：広島大学文書館を一例に」『東京学芸大学大学史資料室報』3、2016、p.8）。本文で後述するように、私はこの小池氏の考え方は正しいと考えている。

3　ただしカフェテリアが、学内に恒常的に置かれなかったのは、2018 年度当時の大学執行部の判断に基づいている。カフェテリアを恒常的な組織にするという判断もありえたからである。

4　以下の概要については、特に根拠を明示していない場合は、本文で後述する『Booklet「学芸カフェテリア」』（第 1 号～最終報告書、2008 ～ 2011。なお以下ではブックレットと略す）および、学芸カフェテリア 10 年史編纂委員会編『学芸カフェテリア 10 年史』（同委員会発行、2019。以下では 10 年史と略す）に基づいている。

5　カフェテリアという名称から、2015 年に附属図書館に併設されたカフェ（note cafe）とよく間違えられるが、別の施設である。

6　GP は、Good Practice（優れた取組）の略。

7　ブックレット 1（2008）の表紙裏の久保田慶一（当時の学芸カフェテリア・ファシリテーター）「Booklet「学芸カフェテリア」について」による。

8　この名称は、企業の文化活動として行われていた「カフェテリアプラン」に基づいているという（前掲 10 年史 p.7、p.24）。

9　本来スタッフという言葉は、カフェテリアに関わる教員と、大学の正規の事務職員、GP の予算で雇用されたファシリテーター、キャリアプランナーなどの全体を指していたようである（【学生モニター委員会 / カフェメイツ会議】ファイルに綴じこまれている「学芸カフェテリア・スタッフ会議」等の記録より）。しかしかなり早いうちから、カフェテリア・オフィスに常駐して会議や講座の企画・運営、人の招致、印刷物の作成、学生相談等に関わっていたキャリアプランナー等を主として指す言葉として使われるようになったと思われる。本稿では、こうした人たちをスタッフと呼ぶことにする。なお【　】という括弧については、注 20 を参照。

10　文部科学省から通常の運営費交付金の他に、この GP のように特別な予算措置がされた場合は、その予算が適正に使われたかどうかをチェックするために、学外の人から成る外部評価委員会が設置されるのが一般的である。

11　講座は学修支援メニューと、キャリア支援メニューに分けられていた。スタッフおよびカフェメイツが、講座の企画・運営を担っており、講師は学外から招くこともあれば、学内の教職員が担当することもあった。

12 「キャリア・ナビ」とも呼ばれており、キャリアカウンセラーの資格をもつキャリアプランナーが相談に当たっていた。

13　オフィスにはスタッフが常駐して相談に当たっていた。また学生が自由に使えるパソコンや図書が置かれており、学生の「居場所」としても機能していた。

14　前掲のブックレットの他に、『News Letter』（第 1 号～第 6 号、2008 ～ 2010）を発行していた。なお本文で後述するフリーペーパーも、印刷物と考えてよいだろう。

15　前掲 10 年史による。

16　後述のように学生相談数は、実は記録されていない。ここで述べた数字は、私が資料から把握した 2008 年ののべ相談者数である（ブックレット最終報告書、p.21）。

17　第 1 号（2008 年、全 56 頁）、第 2 号（2009 年、全 75 頁）、第 3 号（2010 年、全 94 頁）、最終報告書（2011 年、全 130 頁）。いずれも年度末（3 月）に発行されており、すべて A5 版である。最終報告書も第 1 号～ 3 号と同じ体裁で作られている。これはすべてカフェテリアに残されている。

18　第 1 号（2008 年 2 月発行）、第 2 号（2008 年 10 月発行）、第 3 号（2009 年 4 月発行）、第 4 号（2009 年 10 月発行）、第 5 号（2010 年 4 月発行）、第 6 号（2010 年 10 月発行）。体裁はブックレットに似ているが、10 頁ほどの薄いものである。内容はカフェテリアの諸活動の紹介、関わる教職員や学生の紹介が中心となっている。これについては、第 2 号以外が、カフェテリアに残されている。

19　これには発足時に関わっていた教員の寄稿が掲載されており、そこからは現在残されている資料からはわからない具体的な状況を知ることができる。ただし全体で 73 頁の冊子なので、収録されている資料はそれほど多くはない。

20　ファイルに綴じられた資料の場合、ファイルのタイトルを【　】で示すことにする。

21　削除されているのは、2 の（4）「現在の学生支援を行う教職員の資質向上について」の部分と、7 の「過去の選定状況」である。図の改変は、よりわかりやすくまとめようとしたもので、基本的な構造は変わっていない。

22　たとえば【平成 25 年度学生キャリア支援センター会議】ファイルに綴じられている「第 1 回学生キャリア支援センター会議議事要録」。ただし、こうした形式の議事要録は、随所に見られる。

23　学内の教職員の講座についてはすべてをビデオで記録し、学外者の講座は講演者によって撮る場合と撮らない場合とがあったという（2018 年現在のカフェテリアのスタッフのご教示による）。ただし著作権の問題もあり、当初より学外には公開していない。またカフェテリア閉鎖後は、学生課で保存するという。

24　2018 年現在のカフェテリアのスタッフのご教示による。

25　教員養成を中心的なミッションとする大学は、原理的に内部が細分化される。そのため学内広報の重要性と必要性は、他の大学より高くなる。

26　本学ではあまりこうした情報は提供していない（と言うか、本気に取り組んでいない）が、私立大学ではかなり以前より取り組んでいる。

撫子会保存資料　解題

小正展也（大学史資料室専門研究員）

はじめに

2019 年 2 月 22 日、東京学芸大学大学史資料室（以下、大学史資料室と略記）は撫子会（なでしこかい）保存資料の公開を開始した。この度の撫子会保存資料の公開は 2012 年 4 月 1 日に大学史資料室が開室してから最初の資料公開となる記念すべきものである。

撫子会保存資料は東京府豊島師範学校（以下、豊島師範と略記）・官立東京第二師範学校（以下、東京第二師範と略記）の同窓会組織である撫子会が収集した資料群である。撫子会が会員の高齢化により同窓会活動を終止するのに伴い、当資料群は 2006 年 9 月に東京学芸大学附属図書館へ寄贈された。現在は大学史資料室が当資料群を管理している。

撫子会保存資料が本学附属図書館へ寄贈されることとなった経緯については現在のところ不明な点が多い。当資料群が本学へ寄贈された理由もあまり明確ではないが、資料管理上の問題が関係しているようである。

撫子会保存資料が寄贈された頃に『豊島師範・東京第二師範同窓会撫子会保存資料目録』（撫子会有終記念資料整備委員会、2006 年 9 月、以下『撫子会保存資料目録』と略記）という目録が作成されている。大学史資料室では撫子会保存資料の燻蒸を行った後、『撫子会保存資料目録』を参照しながら新たな公開用目録の作成作業を進めてきた。このような作業を経て完成したのが今回、大学史資料室サイト上に公開された「豊島師範・東京第二師範同窓会　撫子会保存資料目録」（以下、「撫子会保存資料目録」と略記）である。今後、撫子会保存資料の利用が進むと思われるので当資料群の理解のために必要な事項について簡単に述べていきたいと思う。

1. 豊島師範・東京第二師範について

最初に撫子会員の母校である豊島師範・東京第二師範の沿革について簡単に説明しておきたい。東京学芸大学は 1949 年 5 月 31 日に新制大学として開学したが、その時に設立母体の一つとなったのが東京第二師範であった。また東京第二師範の前身校は 1908 年 11 月 14 日に池袋の地に設置することが東京府によって告示され、1909 年 4 月 17 日から授業を開始した豊島師範である。

豊島師範は東京府立では第三番目の師範学校となる。当時、豊島師範のような道府県立の師範学校は主に小学校本科正教員を養成するための中等教育機関だった。日露戦後の東京府は都市部への人口集中と義務教育年限延長による就学児童急増問題に対処するために豊島師範を設立したのであった。

その後、道府県立の師範学校は 1943 年 3 月 8 日公布の改正師範教育令によって官立（国立）の専門学校程度の教育機関に昇格する。豊島師範も 1943 年 4 月 1 日から官立の東京第二師範となった。豊島師範・東京第二師範は 1944 年 4 月 1 日に東京都本郷区東片町（当時）に東京第二師範学校女子部が設置されるまでは男子校であった。東京第二師範学校女子部が設置されたことによって、もとからあった池袋校舎の方は東京第二師範学校男子部となる。そして第二次世界大戦後の日本の学制改革によって師範学校制度が廃止されたことに伴い、1951 年 3 月 31 日に東京第二師範学校（男子部・女子部）は廃校となった。

2. 撫子会と撫子会保存資料の来歴について

1909 年 4 月に開校した豊島師範では 1918 年 10 月 17 日に最初の同窓会が開催された。その後、1922 年 10 月 17 日に豊島師範の同窓会組織として撫子会が設立される。戦前の撫子会の活動についてはほとんど分かっていないが『東京学芸大学二十年史　―創基九十六年史―』（東京学芸大学創立二十周年記念会、1970 年）によると「毎年総会を開き、会員の親睦と結束を図」っていたようである（同 923 頁）。撫子会員は豊島師範が男子校であったため圧倒的に男性が多いが、東京第二師範学校女子部の学生も 1946 年 3 月 23 日に第 1 回の卒業生が出てから撫子会員となっている。

東京第二師範の廃校後、撫子会の活動は一層活発になったようである。東京第二師範廃校後の撫子会の活動全般については記念誌である『撫子八十年』（撫子会、1988 年）・『師範教育を想う』（撫子会、1997 年）を参照していただきたいが、本稿で当資料群の形成との関係から注目するのは撫子会が 1975 年ごろから開始した資料収集活動である。1975 年頃から撫子会は資料整備特別委員会（資料収集特別委員会と記載されている資料もある）を設置し母校である豊島師範・東京第二師範に関する諸資料の収集を開始した。撫子会の会報である『撫子だより』に掲載された記事の中に当時の撫子会の資料収集に関する問題意識などが窺えるものがあるので長文であるが引用してみる。

> 二つの提言
>
> なでしこの資料
>
> 　なでしこゆかりの物品を一ヶ所に集めて保存したらどうか。ひとりひとりが、それぞれ個人が貴重ななでしこの資料を持ったまま、散逸してしまうのはあまりにも惜しい。
>
> 　いろいろの種類のものを集めて分類すれば、活きた、なでしこの歴史となり、また東京都の教育の歴史を語る重要な資料ともなろう。
>
> 　さいわい成美会館があるから、とりあえず一室を資料室として借りて、そこに集めたらどうだろう。（後略）
>
> （「〔巻頭言〕二つの提言」『撫子だより』57 号、1974 年 12 月 25 日。本稿における『撫子だより』からの引用は『復刻　撫子（自第五一号　至第一〇七号）』〔整理番号「JP-TKYGA-1-TOS-10-136」〕より行った。以下同様。）

> （前略）わが撫子会本部と支部、現職と先輩等の間から、「母校豊島師範学校・同附属小学校の教育は、歴史的にみても立派な使命を果してきた。また、激動変転する今日及び将来の、教育改革の大きな光ともなるであろう。池袋の駅頭には、あのなつかしい思い出の校舎・校庭・農場・運動場の影はないが、せめて当時の教育をしのび、語りあえる資料を集めたいものである」という意見がもり上がり、高橋幹事長の音頭で、資料収集特別委員会が発足することになった。（後略）
>
> （「〔巻頭言〕撫子資料室の創設　副幹事長小山昌一」『撫子だより』60 号、1975 年 12 月 20 日）

東京第二師範学校男子部は 1945 年 4 月 13 日の空襲によって附属校舎以外の建物（師範学校の校舎や寄宿舎など）が悉く焼失した。東京第二師範学校女子部でも同日の空襲によって女子部第二寮舎が焼失している。その後、東京第二師範学校男子部は 1946 年 5 月 7 日に東京都小金井町（当時）の旧陸軍第三技術研究所跡地（現在の本学小金井キャンパス敷地の一部）に移転した。東京第二師範学校男子部の小金井移転後も唯一、池袋の地に

残っていた東京第二師範学校男子部附属国民学校は 1949 年の本学設立後に東京学芸大学附属豊島小学校となるが、1964 年 3 月 31 日に閉校となっている。東京第二師範学校女子部も本学設立後、本学の追分分校となっていたが、本学キャンパスの統合計画により 1953 年 3 月 31 日に廃止された。豊島師範・東京第二師範学校（男子部・女子部）の卒業生にとっては自分たちが曾て通った池袋・追分の校舎などが消えてしまったこともあって記念事業の一つとして資料収集活動を開始したようである。

資料整備特別委員会では資料の収集・整理・展示を 1975 年度からの三ヶ年計画で考えていた。『撫子だより』によると資料整備特別委員会が考えていた収集すべき資料は次のようなものであった（「座談会　豊師の内実を後世に！！　―資料整備特別委員会の抱負と施策―」『撫子だより』第 60 号、1975 年 12 月 20 日）。

（1）写真類　（2）制服制帽　（3）運動部ユニホーム　（4）校友会誌・校友名簿　（5）同期会発行会誌　（6）運動部・文化活動各部の記録　（7）教科書類　（8）各期の卒業アルバム、修学旅行等アルバム　（9）賞状・辞令類　（10）校舎設計図・平面図類　（11）学校周辺の変遷を語る資料　（12）豊師・第二師範にかかわる新聞・雑誌等の記事類　（13）在校時の作品・成績物等　（14）女子部関係の記録・いっさいの資料　（15）附小関係の記録・児童の作品類　（16）豊島修練会関係の資料　（17）撫子会関係の資料　（18）個人の日記・教生実習記録類　（19）旧師の書簡等旧師に関する資料

撫子会員などに向けて資料提供の呼びかけがなされ、「恩師、会員、約五十名の方々から寄せられた資料約千点を、受入れ、分類し、展示する作業」（「なでしこ資料室の片隅から」『撫子だより』第 66 号、1977 年 12 月 20 日）が 1976 年の暮から 1977 年 4 月にかけて行われた。1977 年 4 月 23 日には成美会館〔1967 年 6 月 10 日に東京都東久留米の地に竣工。撫子会と偲豊会（附属父兄の団体）の双方から役員を送って組織した豊島修練会が運営した。〕内に撫子資料室が開室する。『撫子だより』によると撫子資料室では収集・整理された諸資料が展示されていたようである（「資料室コーナー」『撫子だより』第 80 号、1982 年 7 月 31 日、など）。

資料整備特別委員会が作成した収集資料リストなどは現在の撫子会保存資料中には存在しないが、先述のようにして収集・整理された資料によって撫子会保存資料の原型が形成されたと推測される。そして撫子会保存資料の中には 1977 年以降の資料も多数存在するので、資料整備特別委員会による資料収集活動終了後も撫子会は会員による資料の寄贈を引き続き受けていたと考えられる（寄贈なので自然に資料が集まってきたと言うべきかもしれない）。このようにして形成されたと推測される撫子会保存資料が本学に寄贈された頃の資料群の状況を記述したのが『撫子会保存資料目録』である。『撫子会保存資料目録』の作成の経緯についてもほとんど情報がないが、撫子会保存資料が本学に寄贈されるまでの来歴については現在のところ以上のように考えている。

3. 撫子会保存資料の概要

最後に「撫子会保存資料目録」に依りながら撫子会保存資料の概要について簡単な紹介を試みたい。

今回、大学史資料室が公開した「撫子会保存資料目録」では『撫子会保存資料目録』における分類項目をそのまま採用している。それは『撫子会保存資料目録』における元々の分類を尊重すべきだと考えたからである。

『撫子会保存資料目録』では「1 － 1　学校誌（校友会誌）」から「7　同窓著作図書」までの 13 通りに分類されていた。「撫子会保存資料目録」には『撫子会保存資料目録』の分類項目を掲載していないが、「撫子会保存資

料目録」中の整理番号を見れば分かるようになっている。「撫子会保存資料目録」中の整理番号は大学史資料室が開発した師範学校アーカイブズの方式に倣って附されている。例えば「JP-TKYGA-1-TOS-01-001」は「日本－東京学芸大学大学史資料室－資料群の番号（撫子会保存資料は 1）－豊島師範－分類項目番号（撫子会保存資料では 01 ～ 12。01 は「学校誌（校友会誌）」）－分類内での資料番号」を意味している。『撫子会保存資料目録』の分類項目と整理番号中の分類項目番号の対照については【表】を参照していただきたい。

【表】「撫子会保存資料目録」の整理番号中の分類項目番号と『撫子会保存資料目録』に於ける分類項目の対照

整理番号中の分類項目番号	『撫子会保存資料目録』に於ける分類項目
01	1－1　学校誌（校友会誌）
02	1－2　校友会名簿
	2　教科書
03	3－1　生活用具
04	3－2　徽章・記念品
05	3－3　学校教務・学校生活
06	4－1　教授案
07	4－2　作品
08	4－3　写真・アルバム
09	5　研究資料
10	6－1　同窓会誌・会報・記念誌
11	6－2　同窓会名簿
12	7　同窓著作図書

『撫子会保存資料目録』の「2　教科書」の項目に記載されている資料（教科書）は 2014 年 2・3 月頃の段階で撫子会保存資料中に 1 点も存在しない状態であった。そのようになった経緯は分からないが『撫子会保存資料目録』の「2　教科書」の項目に記載されている資料（教科書）のほとんどは現在、本学附属図書館の教科書のコレクションに組み込まれているようである。そのため「2　教科書」の項目には「撫子会保存資料目録」の整理番号中の分類項目番号を附していない。また 2014 年 2・3 月の段階で『撫子会保存資料目録』に記載されている資料で所在不明になっているものも多数あった。こちらも経緯は不明であるが何らかの理由で返却されたりしてそのようになったと推測される。

以下、『撫子会保存資料目録』における分類項目ごとに概要を記す。

①「1－1　学校誌（校友会誌）」

ここには豊島師範の校友会誌・学年会報・サークル誌、豊島師範附属小学校の学報、撫子会が戦後に刊行した記念誌などが収められている。ここで注目したい資料は豊島師範の校友会誌である。東京第二師範学校男子部のほとんどの建物が 1945 年 4 月 13 日の空襲によって焼失したため豊島師範内部の資料がほとんどないとされている状況下において豊島師範研究の基礎資料の一つとなるべき重要なものである（ただし残念ながら全号揃ってはいない）。

②「1－2　校友会名簿」

ここには豊島師範校友会・報国団の名簿が収められている。これも先述の校友会誌と共に豊島師範研究の基礎となるべき重要な資料である。

③「3－1　生活用具」

ここには豊島師範の学生が実際に使用した脚絆やユニホーム・腕章などが収められている。脚絆は学校教練の際に使用されたものであると推測される。

④「3－2　徽章・記念品」

ここには豊島師範の校友会活動や寄宿舎での自治活動の際に使用された徽章や記念品が収められている。徽章や記念品が実際にどのようなものであったかを実物で確認することが出来る。校友会活動や寄宿舎での自治活動についての今後の研究に必要不可欠な資料であると考えられる。

⑤「3－3　学校教務・学校生活」

ここには撫子会員の手元に残されていた主に豊島師範・東京第二師範（男子部）の教務や学校生活に関する資料が収められている。入学関係書類や通知簿・卒業証書などの実物を見ることが出来る。

⑥「4－1　教授案」

ここには撫子会員が師範学校の学生時代に記した教授案（指導案）や教育実習記録が収められている。

⑦「4－2　作品」

ここには撫子会員が豊島師範在籍時に受講した講義の内容を記したノートなどが収められている。受講ノートのほとんどは小竹正一氏のものである。現在は本学附属図書館が管理している撫子会保存資料中の教科書と共に豊島師範での教育内容の一端を明らかにすることが出来る可能性のある資料だと考えられる。

⑧「4－3　写真・アルバム」

ここには卒業記念写真帖など豊島師範での学校生活の様子を窺うことが出来る写真資料が収められている。文献だけでは分からない学校生活の実際の様子を写真で確認することが出来る。

⑨「5　研究資料」

ここには主に東京第二師範学校男子部附属小学校・東京第二師範学校女子部附属小学校・本学附属豊島小学校・本学附属追分小学校・本学附属小金井小学校が編集・刊行した研究図書・研究紀要や撫子会員の個人研究の成果を纏めた研究図書などが収められている。撫子会と関係の深い附属小学校の研究活動について知ろうとする場合に便利である。

⑩「6－1　同窓会誌・会報・記念誌」

ここには主に豊島師範・東京第二師範の同窓会誌・同期会誌が収められている。ここで注目したい資料は同期会誌である。豊島師範・東京第二師範では卒業年度ごとの同期会がそれぞれ記念誌を自主的に発行していたようである。そのような同期会誌が大量に纏まって収集されていることは当資料群の大きな特色の一つであると言える。

⑪「6－2　同窓会名簿」

ここには撫子会員名簿が収められている。先述の校友会名簿と共に重要な基本資料である。

⑫「7　同窓著作図書」

ここには撫子会員が教員などを定年退職した後に著した回顧録、句集・歌集、画集などが収められている。先述の同期会誌と同様に撫子会員の著作が大量に纏まって収集されているのは当資料群の特色の一つであると言える。

おわりに

同窓会誌、校友会誌、撫子会会員の師範学校在籍時の受講ノート、記念品、撫子会会員の著作物などの多種多様な資料で構成されている撫子会保存資料の閲覧方法については大学史資料室サイト上にアップされている「東

京学芸大学大学史資料室閲覧利用案内」を見ていただければと思う。撫子会保存資料が多くの方に活用されることを願っている。

大学史資料室展示会報告「学藝アルバムー小金井キャンパスと附属学校のあゆみー」

椿真智子（人文社会科学系教授）

はじめに

大学史資料室の第 6 回展示会を 2018 年 10 月 29 日（月）～ 11 月 12 日（月）の 15 日間、本学附属図書館 1 階にて行った。これまでの展示テーマは、師範学校ならびに現在にいたる本学の歴史や大学生活等が中心であったが、今回はじめて附属学校に焦点をあてることとなった。この背景には後述のとおり、附属小金井中学校校長室に保管されていた極めて貴重な資料が大学史資料室に寄贈されたことが大きな契機となった。また今回、展示会場として初めて図書館 1 階正面入口左手「検索コーナー」のスペースを使用した。2015 年・2016 年度の展示では図書館 1 階奥の「ラーニングコモンズ」を使用させていただいたが、「ラーニングコモンズ」は学生が普段グループ学習や自習等で頻繁に利用しているため、展示空間としてはややそぐわない面があるのと、場所が奥まっていてわかりにくいなどの課題があった。今回附属図書館との事前打ち合わせで、入口すぐで目につきやすく、まとまった展示空間を確保できる「検索コーナー」の利用を提案いただいき、当資料室としては結果として大変適切であったと認識している。展示期間は 11 月 2 ～ 4 日開催の「小金井祭」ならびに本学ホームカミングデーを含む期間とした。今回の展示は主に附属小金井中学校の資料を中心とするものであったため、従来からの本学卒業生や在校生・教職員に加え、附属学校卒業生の来場をも期待してこの期間を設定した。実際の来場者は在校生が多くの割合を占めたが、アンケート回答者数だけでも 140 名弱にのぼった。附属学校の歴史に普段ふれる機会の少ない多くの方々に、附属小金井中学校の歴史と生活史の一端を知っていただくことができたのではないかと考えている。

1. 附属小金井中学校と「金中アーカイブズ」

1947（昭和 22）年 4 月、6・3 制による新制中学校発足に伴い、師範学校に附属中学校が設置されることとなった。池袋駅西側にあった東京第二師範学校男子部は戦災により本校舎が焼失し、小金井の陸軍技術研究所跡に移転していたため、そこに附属中学校を開設することとなった。ただし附属小学校は依然として池袋に置かれたため、児童・生徒の一貫教育や進路指導等に関する要望もあり、附属中学校は小金井 2 学級、池袋 1 学級、計 126 名の 1 年生でスタートした。1956（昭和 31）年度末には池袋教室が閉鎖され、翌年度から 3 学年とも小金井に統合された。

今回の展示は、東京学芸大学附属小金井中学校の校長室で発見された記録資料群（以下、「金中アーカイブズ」とする）から選定した資料を中心に企画した。ちなみに「金中」は附属小金井中学校の略称である [1]。「金中アーカイブズ」は、主に東京第二師範学校男子部附属中学校ならびに附属小金井中学校の教育研究活動に関する貴重な記録資料群である。200 点近い資料は第二次世界大戦前後から 2000 年代にかけて作成されたものであり、とりわけ昭和 20 ～ 30 年代の社会や学校現場が大きく転換した変革期の資料が多く残されていたことは奇跡的ともいえる。

学校という場は、組織・運営や教育・研究活動に関する膨大な記録資料を日々生み出しているが、それを教

育・文化遺産として保存管理し公開・活用することには多くのハードルが存在する。日々の教育活動に加え、社会変化や山積する課題への対応が求められる学校が、アーカイブズに多大な時間・労力と保管スペースを割くこと自体困難ともいえる。アーカイブズ保存・公開と個人情報のあり方との関係も極めて難しい問題である。資料保存への道筋をつけてくださった南道子前校長、そして大学史資料室への移管を快く認めてくださった奥住秀之校長ならびに村上潤副校長にあらためてお礼を申しあげたい。

2．展示構成と「金中アーカイブズ」の特徴

展示内容は次の 4 部門で構成した。それは、第 1 部「東京学芸大学と附属学校・園の系譜」、第 2 部「昭和 20 ～ 30 年代の小金井キャンパスと附属小金井中学校」、第 3 部「昭和 20 ～ 30 年代における附属小金井中の生活史」、第 4 部「アーカイブズにみる附属小金井中の教育研究活動」である。「金中アーカイブズ」において注目すべき点の第一は、第 3 部で扱った「校友会誌（生徒会誌）」や「生徒会新聞」「文集」など、学校や生徒の生活史がいきいきと描かれた資料が多く残されていたことである。

第二次世界大戦前の中等学校には「校友会」という組織が存在し、学校における部活動などの課外活動全般を統括していた。大半の学校では教師が主導的にその管理・運営を行った。戦後は学生の自治訓練の場として再組織化がはかられたが、実際には管理的・保守的性格を内包したまま広く普及していった。「金中アーカイブズ」における「校友会誌（生徒会誌）」や「生徒会新聞」からは、活発かつ多彩な課外活動の記録や激しい議論をくりひろげた生徒会の様子、理想とする社会像を熱く語る教師の姿や自由闊達な生徒たちの雰囲気など、実にさまざまな学校生活が浮き彫りになる。一方、文集には、戦争の影を残した家庭生活の一端や家族関係、自身の生き方に関する思いや社会的関心などが綴られ、教師や生徒たちの幅広い日常が垣間みえる。

「金中アーカイブズ」において注目すべき点の第二は、昭和 20 ～ 50 年代の教育実習記録、とくに実習生の作成した「研究授業指導案」が数多く残されていることである。展示では、数学：単元「遠足」、理科：単元「着物はどのようにしてつくられるのか」、社会：単元「学校や家庭の生活を明るくするにはどうしたらよいか」など、ユニークな視点や題材、時代状況を示す「研究授業指導案」を抜粋して展示した [2]。

展示会場の様子

附属小金井中の生活史に関する展示

3.「金中アーカイブズ」構築と森秀夫先生

「金中アーカイブズ」構築の最大の立役者は、実は附属小金井中学校・元副校長の森秀夫先生である。森先生は東京府豊島師範学校本科第一部、同専攻科を卒業され、戦後、中央大学法学部在学中の 1947（昭和 22）年に東京第二師範学校に社会科担当の教官として着任された。附属小金井中学校『五十年のあゆみ』（19 頁）に森先生が寄稿された「草創のころ」には、当時小金井校舎は「戦時中の陸軍第三技術研究所の粗末な建物で天井もなく、生徒も下駄ばきが多くノートや鉛筆にも不自由する」状態であったことが記されている。

小金井校舎で国立大学附属中学校の社会科教員としての生活を始められた森先生は、本学や他大学で社会科教育論を講じつつも金中一筋の教員生活を送られた。食糧難、物不足の中でも生徒たちと教室の中だけではなく、積極的に校外学習を行っていたようである。1975（昭和 50）年には同校副校長として附属学校経営にあたられるとともに、社会科教育研究の第一線で活躍された。今回展示した森先生の「昭和 20 年代の社会科－東京第二師範学校男子部附属中学校の事例―」は、戦後まもない時期における小金井中の社会科教育の実態を知るうえで大変貴重な論考である。

おわりに

「金中アーカイブズ」には森先生が記録資料を大変丁寧に整理・保存された痕跡がいたる所に残されていた。書類をとじた多くのファイルに森先生のお名前が記されている。国内最多の附属学校数を誇る本学であるが、教育・研究・経営の資料群がここまで残されている事例は珍しい。森先生の資料的価値を見極める「眼」と後進のために保管しようという意思なくして「金中アーカイブズ」は存在しない。「金中アーカイブズ」の構築は、激動する社会の中で、森先生の国立大学附属中学校教員、そして『全国六・三制義務教育の成立』（時潮社刊）などの著作が物語る教育史研究者としての学知あってこその仕事であるといえよう。

実は大変残念なことに、本展示会終了日の前日 11 月 11 日、森秀夫先生が享年 96 才でご逝去されたことを後日知ることとなった。本学および附属学校の歴史はもとより、日本の師範学校史・附属学校史研究にとっても極めて重要なアーカイブズを構築してくださった森秀夫先生に深く感謝申しあげるとともに、謹んで哀悼の意を表し、心よりご冥福をお祈り申しあげたい。

注

1　附属小金井幼稚園長で大学史資料室員の君塚仁彦氏によれば、現役生徒の多くは「かねちゅう」と呼ぶ一方で、中学校教職員には「かねちゅう」派と「きんちゅう」派が混在し、大学教員は「きんちゅう」と呼ぶ場合が多いそうである。

2　附属小金井中学校における教育実習や研究授業等については『五十年のあゆみ』において詳細に紹介・解説されている。

参考文献

東京学芸大学附属小金井中学校『三十年のあゆみ』1976 年.
東京学芸大学附属小金井中学校『五十年のあゆみ』1997 年.
森秀夫「昭和 20 年代の社会科－東京第二師範学校男子部附属中学校の事例―」『東京学芸大学附属小金井中学校研究紀要 XXII』1984 年.
森秀夫『全国六・三制義務教育の成立』時潮社，1986 年.

平成 30 年度活動報告

・ウェブサイトのリニューアル（平成 30 年 5 月 31 日）
・大学史資料室展示会の開催（平成 30 年 10 月 29 日～ 11 月 12 日）
　「學藝アルバム―小金井キャンパスと附属学校のあゆみ―」
・「撫子会」資料群目録と資料を公開（平成 31 年 2 月 22 日）
・資料閲覧室を開設（平成 31 年 2 月 22 日）
・大学史資料室報の発行（平成 31 年 3 月 31 日）
・資料一時保管室を再整備拡充
・NHK への資料協力
・法人文書の保存等に関する検討 WG の立ち上げと具体的な検討の開始
・旧師範学校アーカイブズシステムの運用（継続）
・50 年史関連資料の目録作成（継続）
・資料環境の維持（継続）
　大学史資料室保存環境調査
　データロガーの設置による温度・湿度の測定
　フェロモントラップの設置による虫害虫の捕獲調査
　微生物センサによる浮遊菌測定
・収集資料
　附属小金井中学校草創期の資料群
　青山師範学校時代の写真　等

大学史資料室運営委員会委員

◎川手圭一　副学長・附属図書館長・人文社会科学系教授
宿谷晃弘　人文社会科学系准教授
新免歳靖　自然科学系講師
大石　学　人文社会科学系教授
服部哲則　自然科学系講師
狩野賢司　附属学校運営参事
石橋英二　教育研究支援部長
◎は委員長

大学史資料室室員

◎川手圭一　副学長・附属図書館長・人文社会科学系教授
○大石　学　人文社会科学系教授
及川英二郎　人文社会科学系教授
金子真理子　教員養成カリキュラム開発研究センター教授
君塚仁彦　総合教育科学系教授
椿真智子　人文社会科学系教授
服部哲則　自然科学系講師
藤井健志　人文社会科学系教授
小正展也　大学史資料室専門研究員
松本　功　大学史資料室事務室長
◎は室長　○は副室長

東京学芸大学大学史資料室報 Vol. 6

平成 31 年 3 月 31 日発行
東京学芸大学大学史資料室
東京都小金井市貫井北町 4-1-1
メール：shiryou@u-gkaugei.ac.jp

東京学芸大学
大学史資料室
Office of Tokyo Gakugei Univ. Archives

［発行］東京学芸大学大学史資料室［発行年月日］平成31年3月31日